（独立行政法人教員研修センター委嘱事業）

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

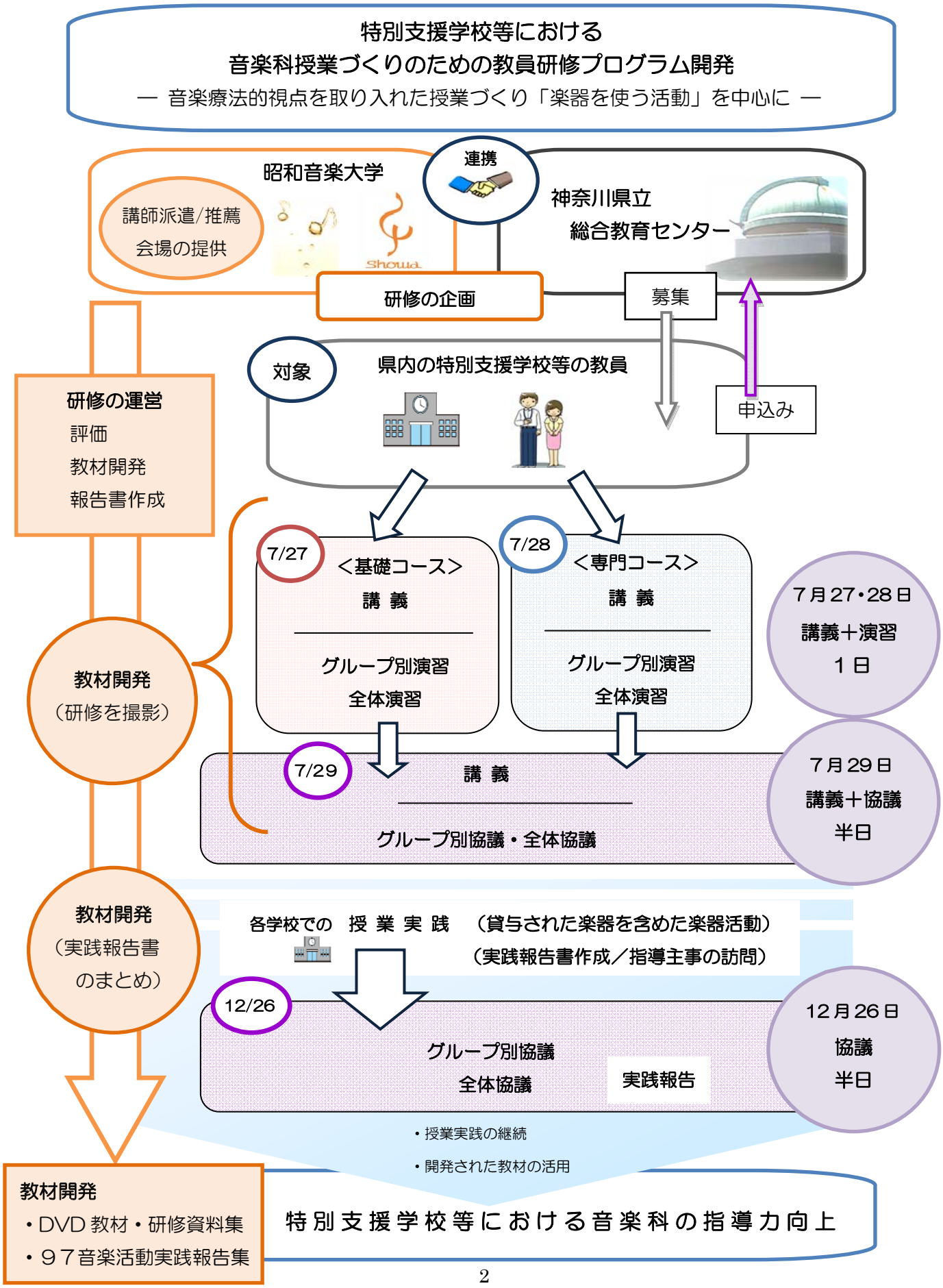
報　告　書

プログラム名	特別支援学校等における音楽科授業づくりの教員研修プログラムの開発 ―音楽療法的視点を取り入れた授業づくり「楽器を使う活動」を中心に―
プログラムの特徴	本研修プログラムは、特別支援学校等で音楽科を担当している教員を対象としており、特別支援教育の音楽科授業づくりの指導力向上を目的とし、音楽科の器楽（楽器を使う）活動を中心に、児童生徒の実態に即した音楽療法的視点を取り入れた授業づくりの研修プログラムである。 プログラムの特徴は、音楽療法的視点という新しい視点を取り入れた授業づくりの内容と、講義・演習・協議を組み合わせた研修形態にある。参加者全員に共通理解を図る全体演習、音楽活動を模擬体験（ロールプレイ）するグループ別演習、研修成果を確認する実践報告のグループ別と全体の協議等、これらが日程に配慮しながら設けられている。 成果教材としては、研修全体（講義・演習・協議）を録画した DVD 教材と、研修の資料集並びに教員が実践した 97 の実践報告をまとめた CD 教材「97 音楽活動実践報告集」が作成されている。

平成 24 年 3 月

機関名：昭和音楽大学
連携先：神奈川県立総合教育センター

研修の全体概要（図 1）


特別支援学校等における
音楽科授業づくりのための教員研修プログラム開発
― 音楽療法的視点を取り入れた授業づくり「楽器を使う活動」を中心に ―
昭和音楽大学
講師派遣/推薦
会場の提供
連携
神奈川県立
総合教育センター
研修の企画
募集
対象
県内の特別支援学校等の教員
申込み
研修の運営
評価
教材開発
報告書作成
7/27
＜基礎コース＞
講 義
グループ別演習
全体演習
7/28
＜専門コース＞
講 義
グループ別演習
全体演習
7月27・28日
講義＋演習
1日
教材開発
（研修を撮影）
7/29
講 義
グループ別協議・全体協議
7月29日
講義＋協議
半日
教材開発
（実践報告書
のまとめ）
各学校での 授 業 実 践 （貸与された楽器を含めた楽器活動）
（実践報告書作成／指導主事の訪問）
12/26
グループ別協議
全体協議
実践報告
12月26日
協議
半日
・授業実践の継続
・開発された教材の活用
教材開発
・DVD 教材・研修資料集
・９７音楽活動実践報告集
特別支援学校等における音楽科の指導力向上

Ⅰ　開発の目的・方法・組織

1. 開発の目的

近年、特別支援学校の入学者数増加や子ども達の障がいの重度・重複化や多様化、障がいの程度の幅広さ等が指摘されており（文部科学省、2008）、一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育や支援の実施が求められている（文部科学省、2008）。音楽科においても、子どもの実態に応じた臨機応変に対応できる教育システムや教員の指導力の向上、及び視野の拡充の必要性等（南、2009）が示唆されている。このような状況を反映して、特別支援教育に携わる教員への研修は、その多様化している児童生徒の実態に即した内容の研修が求められていると考える。本プログラムは、教員の様々なニーズに応えられる研修として、研修の内容と形態の両面に工夫を施した企画を練り、特別支援教育に携わる教員研修のプログラム開発を試みた。

平成 22 年 3 月、昭和音楽大学・昭和音楽大学短期大学部と神奈川県立総合教育センターとの間で連携協力が結ばれ、センターの研修講座への本学教員の講師派遣、また、本学の教職科目の講師をセンターの現職指導主事に依頼することなどを端緒とし、連携事業が始まった。平成 22 年夏季に、総合教育センターが選択研修として企画し本学教員が担当した「特別支援教育における音楽の実践～音楽療法士の視点から～」には、120 名近い神奈川県内の特別支援学校、特別支援学級の音楽科担当教員の参加があり、高い評価を得た。研修後に実施された研修参加者アンケートの結果からは、授業に活かせる音楽療法的視点を導入した音楽活動に対する高い関心と、それらを授業内で実践しようとする教員の意欲的な姿勢、音楽科授業の具体的な課題、そして今後の研修への期待とニーズを把握することができた。

そこで、研修モデルカリキュラムを開発するにあたり、特別支援学校等における音楽療法的な視点を取り入れた音楽科の授業づくりをテーマに取り上げ、教材開発をおこなうことが企画・検討された。

特別支援学校の学習指導要領（音楽科）の目標及び内容について確認し、それぞれの授業づくりについて検討をおこなった。そして、特別支援教育の現状である児童生徒の障がいの重度・重複化に対応すべく「音楽についての興味や関心を引き出す授業づくり」も加え、次の 5 つの授業づくりの開発プログラムが検討された。

1. 楽器を使った音楽活動の授業づくり（器楽）
2. 身体表現を豊かにする授業づくり（身体表現）
3. 音・音楽を聴く力を育てる授業づくり（鑑賞）
4. 表現する力を育む授業づくり（表現する）
5. 音楽についての興味や関心を引き出す授業づくり

検討の結果、平成 23 年度は、1 の「楽器を使った音楽活動の授業づくり（器楽)」と、5 の「音楽についての興味や関心を引き出す授業づくり」に焦点を当て、内容の工夫として新しい視点である音楽療法的視点を取り入れた音楽科授業づくりのモデルカリキュラムを開発することとした。

研修の形態は、講義・演習・協議を組み合わせた。演習においては、参加する教員自身が音楽活動を体験しながら自身の音楽への興味や関心を再認識できるような課題を設定した。また、協議を組み込むことによって、それらの考察を深められるようカリキュラムを検討した。

本研修の目的は、特別支援学校等における音楽療法的視点を取り入れた音楽科授業づくり、楽器を使う活動を中心とした授業づくりとし、特別支援教育に携わり音楽を担当する教員の指導力向上をねらうものとした。

参考文献　南曜子：音楽療法と音楽教育。音楽教育学の未来、304-321。音楽の友社、東京、2009。
文部科学省：平成 19 年度 文部科学白書。日経印刷、東京、2008。

2. 開発の方法

先に述べたように本研修は、研修の内容及び形態の両面について検討を重ねていき、次の方法でモデルカリキュラムを開発するに至った。

- 研修の形態：講義・演習・協議の 3 つ学習形態で実施する。
- コース分け：前半（7 月）の研修は、2 コースに分けて実施する。コースは、参加者が申し込み時に選択する。各コースは、次の通り。
  ①基礎コース：音楽の指導経験が比較的浅い教員を対象
  ②専門コース：音楽科教員、または音楽の指導経験が豊富な教員を対象
- 演習の流れ:参加者全員に共通理解を図る全体演習をおこなった上でグループ別演習を設ける。
- 演習及び協議のグループ分けの方法：授業づくりにおけるニーズに配慮し、状態像が似通った児童生徒を担当している教員が同グループとなるよう編成する。グループ分けのポイントは、以下の通り。
  ・学校種別が同じ：特別支援学校の部門、特別支援学級別。
  ・障がい種別が同じ：例　知的障がいグループなど。
- 演習で使用する楽器：演習では、様々な楽器と活動を紹介する。演習で使用する楽器は音楽療法的視点から選択し、授業実践のために貸与する。
- 演習課題の工夫：楽器を単に音楽活動で使用する楽器と位置づけるのではなく、児童

生徒の視点に立った楽器の見方、鳴らし方、触り方等の課題に取り組む。例えば、「楽器との出会いの課題」から始め、ロールプレイをたくさん取り入れて、児童生徒の気持ちに即した音楽活動の提供の仕方と楽しみ方を演習する。そして音楽への興味や関心を自らで体験できるよう演習課題を作成し取り組む。

- 全体演習（まとめ）：グループ別演習後の全体演習（まとめ）では、グループごとに演習で取り組んだ成果をまとめて発表し、音楽療法的視点を取り入れた音楽活動について共通理解する。
- 学習指導案と音楽療法的視点を取り入れた楽器活動の実践報告書の講義：演習で体験した様々な音楽活動を取り入れた授業の指導案や活動報告書の書き方など、講義を通して理解を深める。
- 実践報告書と協議(7 月)：理解を深めた楽器活動について、お互いにアイディアを出し合いグループ別協議で内容を確認し、全体協議の場でグループ協議した成果を発表する。
- 授業実践した実践報告書の発表(12 月)：受講生全員が、7 月の研修後に授業実践した音楽活動を持ち寄り、実践報告書としてグループ別協議で発表をする。
- 全体協議（グループ別協議の報告）：グループ別協議後の全体協議では、グループごとに協議した成果を実践等も含め報告を発表し、研修の目的とテーマをあらためて参加者全員で確認し理解を深める。
- 音楽活動実践報告集：楽器を使用した音楽活動の授業実践の報告書を資料集としてまとめる。これを研修の成果物として参加者へ配布し、今後の授業実践や授業づくりへの活用を図る。

3. 開発組織

開発は、以下の体制で実施した。

1）研修の企画・運営体制

＜表 1＞　研修の運営体制

担当・役割	氏名	所属・職名
統括	田邊　克彦	昭和音楽大学短期大学部　教授
副統括	井出　和夫	神奈川県立総合教育センター　課長
	小峰　智子	昭和音楽大学音楽学部　准教授
企画／運営／教材開発／報告書作成	伊藤　啓子	昭和音楽大学音楽学部　准教授
企画／運営	持田　訓子	神奈川県立総合教育センター　指導主事

2）研修の講師の体制

＜表 2＞　研修の講師一覧

担当	氏名	所属・職名等
講義	田坂 裕子	昭和音楽大学非常勤講師
講義／全体演習／グループ別演習	伊藤 啓子	昭和音楽大学音楽学部　准教授 日本音楽療法学会認定音楽療法士
講義	持田 訓子	神奈川県立総合教育センター　指導主事
講義／グループ別演習	吉村奈保子	東京国際音楽療法専門学院、特別支援学級講師 日本音楽療法学会認定音楽療法士
グループ別演習	白川ゆう子	昭和音楽大学音楽学部　助教 日本音楽療法学会認定音楽療法士
	飯塚 暁子	ﾐｭｰｼﾞｯｸ･ﾌﾟﾚｲ･ｾﾗﾋﾟｲ研究会　代表 日本音楽療法学会認定音楽療法士
	堀田 和子	東京国際音楽療法専門学院講師 日本音楽療法学会認定音楽療法士
	青木 久美	昭和音楽大学音楽療法研究所嘱託研究員 日本音楽療法学会認定音楽療法士

● 講義担当講師

「子どもの発達と音楽」・・・・・・・・・・・・障がい児教育領域等が専門の講師

「音楽療法的視点を取り入れた音楽活動」・・・特別支援教育の現場で実践経験が豊富な、日本音楽療法学会認定音楽療法士

「学習指導案」・・・・・・・・・・・・・・・・神奈川県立総合教育センター指導主事

「音楽療法的視点を取り入れた指導案」・・・・特別支援学級の現役の音楽講師で、日本音楽療法学会認定音楽療法士

● グループ別演習の講師・・・・・・・・・・・・特別支援教育の現場で実践経験が豊富な、日本音楽療法学会認定音楽療法士

Ⅱ　開発の実際とその成果

１．研修の実際

研修プログラムの日程とグループ別の演習と協議の振り分けについては、＜表 3＞で示す。

＜表 3＞ 研修日程とグループの振り分け（7 月 27 日～29 日、12 月 26 日）

講座日程

日付／時間	7月27日（水） 基礎コース 参加者：50名	7月28日（木） 専門コース 参加者：53名	7月29日（金） 全体 参加者：100名	12月26日（月） 全体 参加者：93名
	8：30－9：00 受付	8：30－9：00 受付	8：30－9：00 受付	
9:00	9:00－ 開会 趣旨説明 調査アンケート	9:00－ 開会 趣旨説明 調査アンケート	9:00－ 開会	
9:10			9：10－9：40 講義 （持田講師）	
9:25	9：25－10：55 講義 （田坂講師）	9：25－10：55 講義 （田坂講師）		
10:00			9：40－10：40 講義 （吉村講師）	
10:40				
10:55			休憩	
11:00	休憩	休憩	10：55－11：30 グループ別協議	
11:10	11：10－12：00 講義 （伊藤講師）	11：10－12：00 講義 （伊藤講師）		
11:30			11:30－12:00：全体協議 今後の説明	
12:00	昼休み	昼休み		
12:30				12：30－13：00 受　付
13:00	13：00－13：30 全体演習 （伊藤講師）	13：00－13：30 全体演習 （伊藤講師）		13：00－　開会
13:30	楽器配布	楽器配布		13:10-14:40 グループ別協議 ①:肢体　②:肢体 ③:知的，自閉･情緒 （中学校特別支援学級） ④:知的，自閉･情緒 （小学校特別支援学級） ⑤:知的，自閉･情緒 （小学校特別支援学級） ⑥:知的　⑦:知的 ⑧:知的　⑨:知的
13:45	休憩	休憩		
14:00	14：00－15：30 グループ別演習 ①：知的，自閉・情緒 ②：知的，自閉・情緒 ③：肢体　④：知的 ⑤：知的	14：00－15：30 グループ別演習 ①：知的，自閉・情緒 ②：知的　③：肢体 ④：知的，自閉・情緒 ⑤：知的，自閉・情緒		14:40－14:55　休憩
15:00				14:55-16:15 全体協議 （活動発表： 各グループ5分）
15:30	15：30－16：15 まとめ （グループ発表）	15：30－16：15 まとめ （グループ発表）		
16:00				
16:15	質疑応答 楽器取扱説明	質疑応答 楽器取扱説明		16：15－16：25 まとめ（統括）
16:30	16：30　終了	16：30　終了		16：25－　閉会 （評価アンケート）

研修の定員（募集時）は、基礎コースと専門コースを合わせて 100 名とし、実際の参加者数は、次のようになった。基礎コース（7 月 27 日）：50 名、専門コース（7 月 28 日）：53 名、基礎と専門が一緒となる全体の講義／協議（7 月 29 日）：100 名、授業実践後の全体の協議（12 月 26 日）：93 名。

次に、＜表 4＞で研修の概要をまとめ、講義・演習・協議について日程に沿いながら簡単にそれぞれの内容を記す。なお、当日配布したレジュメ等については、研修成果物の CD（研修資料集）を参考としていただきたい。

<表 4＞　研修の概要

研修項目		内容と時間	目的	使用教材他
一日研修	講義	子どもの発達と音楽（90 分）	・子どもの発達と音楽の理解	・レジュメ ・PPT
		音楽療法的視点を取り入れた授業づくり（50 分）	・音楽療法的視点の理解 ・音楽療法的視点を取り入れた授業と楽器活動の理解	・レジュメ ・PPT
	演習	全体演習（30 分）	・音楽療法的視点を取り入れた音楽活動についての共通理解	・レジュメ・DVD ・楽器（タンバリン）
		グループ別演習（90 分）	・音楽療法的視点を取り入れた様々な楽器活動の演習	・音楽療法的視点で選んだ楽器各種
		全体演習（まとめ）（45 分）	・音楽療法的視点の活動の確認	・楽器各種
半日研修	講義	学習指導案について（30 分）	・学習指導案、目標設定の主なポイントの確認他	・レジュメ ・PPT
		音楽療法的視点を取り入れた授業の実際（60 分）	・音楽療法的視点を取り入れた楽器活動の指導案例の学習	・レジュメ ・PPT 他
	協議	グループ別協議（35 分）	・音楽療法的視点を取り入れた音楽活動の協議	・レジュメ
		全体協議（30 分）	・グループ別協議の報告と音楽療法的活動の理解と確認	・レジュメ
半日研修	協議	グループ別協議（90 分）	・授業実践した活動の報告と授業づくりのヒントを得る	・実践報告書 ・楽器各種
		全体協議（まとめ）（90 分） ☆　評価アンケート実施	・グループ別協議報告を通して、指導力向上を図る。	・実践報告書 ・楽器各種

1）基礎 ／ 専門コースの講義　（7 月 27・28 日）

① 子どもの発達と音楽（講師：田坂 裕子）

主な内容：乳幼児のコミュニケーションの発達
心の理論
情動共有成立を目指した支援
原始的コミュニケーション
音楽とことば 他

ね ら い ：子どもの発達と音楽の理解を深める。

② 音楽療法的視点を取り入れた授業づくり（講師：伊藤 啓子）

主な内容：音楽療法とは
音楽療法的視点を取り入れた音楽活動
特別支援学校小学部・中学部の音楽科の目標
音楽療法的視点から考える楽器 他

ね ら い ：音楽療法的視点を取り入れた音楽活動及び楽器活動について理解を深め、学習指導要領に則った音楽活動を確認する。

2）基礎 ／ 専門コースの演習（7 月 27・28 日）

① 全体演習　（講師：伊藤 啓子）

主な内容：音楽療法的視点を取り入れた音楽活動の実際
演習課題（楽器の鳴らし方）

ね ら い ：既成概念にとらわれない楽器の鳴らし方を体験し、新たな楽器との出会いを参加者自らが発見し楽しむ、音楽への興味関心をもち、音楽療法的視点の音楽活動について共通理解をする。

② グループ別演習

1 日目（講師：伊藤 啓子、飯塚 暁子、堀田 和子、白川 ゆう子、吉村 奈保子）
2 日目（講師：伊藤 啓子、飯塚 暁子、堀田 和子、白川 ゆう子、青木 久美）
演習課題：「さがそうおともだち」、「楽器の分類」、「楽器の提示の仕方」、「即興的な合奏」他

ね ら い ：教員側、児童生徒側とそれぞれの役を模擬体験（ロールプレイ）し、特に児童生徒の気持ちを考えながら楽器活動を楽しむ。児童生徒の意欲を引き出す指導のポイント等を探る。

③　全体演習（まとめ）　　（講師：伊藤 啓子）

主な内容：グループ別演習の成果発表

ね ら い ：他のグループの様々な演習成果を見ながら、楽器活動のヒントを得て、授業づくりへの活かし方を学習する。

3）全体の講義（7 月 29 日）

①　学習指導案について　　（講師：持田 訓子）

主な内容とねらい：特別支援教育における授業とは

具体的な目標の設定

目標設定の主なポイントを理解する等

②　楽器活動の指導案例　　（講師：吉村 奈保子）

主な内容とねらい：楽器活動の療法的な意義を理解する。

指導案例（特別支援学級、特別支援学校）

4）全体の協議（7 月 29 日）

①　グループ別協議　　（グループは演習時と同じ）

主な内容：楽器を使用した実際の活動についてその展開を協議

ね ら い ：演習で体験した様々な楽器活動を協議し、授業実践へのヒントを得る。

②　全体協議

主な内容：グループ別協議の結果を報告

ね ら い ：グループで協議した内容を報告し、授業実践のヒントと理解を深める。

5）全体の協議（12 月 26 日）

①　グループ別協議（グループは、基礎・専門を混ぜたグループ）

主な内容：授業実践した実践報告書にもとづいた各教員の実践の報告

ね ら い ：様々な実践報告を聞き、授業づくりへのヒントやアイディアを得る。

②　全体協議

主な内容：グループ別協議のまとめと報告、活動発表

ね ら い ：音楽療法的視点を取り入れた様々な授業実践報告を聞き、楽器を使用

した音楽の授業づくりへのヒントやアイディアを得て、指導力の向上を図る。

③　評価アンケートを実施

研修の全体を評価するアンケートを実施

2. 実施上の留意点

● グループ別演習は、可能な範囲で小～中グループの編成（8～15 名）とし、参加者全員が演習課題に取り組めるように配慮をする。

● グループ別演習での環境設定：各グループが演習の課題に集中して取り組めるよう、以下を設定する。

・1 グループ 1 教室を割り当てる。

・各グループに 1 名の音楽療法士（特別支援教育での実践経験豊富な日本音楽療法学会認定音楽療法士）が演習指導者としてかかわる。

・各教室にはピアノ（グランドピアノ）、並びに演習で必要となる全ての楽器を準備する。

● グループ別協議（12 月）の環境設定：協議に集中できるよう、以下を設定する。

・1 グループ 1 教室を割り当て、協議に集中できる場所を設定する。

・協議の前に事前提出された実践活動報告書を、協議資料としてグループごとにまとめ、各グループに配布する。協議が短時間でも円滑に実施でき、協議が深められるように、可能な範囲で環境を整える。

・グループ別協議のグループの分け方：基礎コースと専門コースを混ぜ合わせ、多角的な意見交換ができるようグループ編成に配慮する。

3. 研修の成果（評価結果）

本評価アンケートの回答者について、以下の表及び図にまとめて提示する。

1）回答者の基礎情報　（12 月 26 日受講生）

a.　参加コース

表 a：「参加コース」

コース	人数（n）	割合（n/93）
基礎コース	43 名	46.24%
専門コース	46 名	49.46%
不明	4 名	4.30%
合計	93 名	100.00%

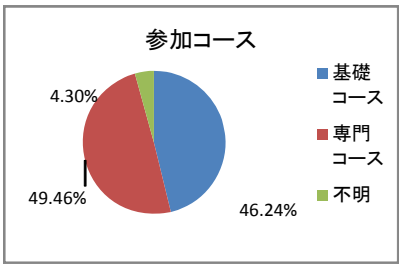


図 a：「参加コース」

b.　所属学校・学級種

表 b「所属学校・学級種」

学校種	人数（n）	割合（n/93）
特別支援学校	58 名	62.37%
特別支援学級	33 名	35.48%
通常学級	1 名	1.08%
無回答	1 名	1.08%
合計	93 名	100.00%

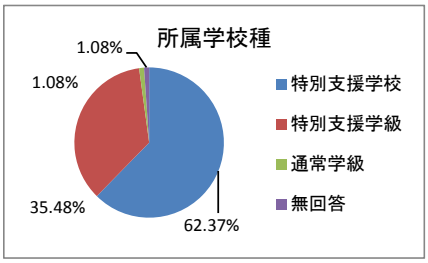


図 b：「所属学校・学級種」

c.　所属学校・学級種　※複数回答あり

表 c：「所属学部」（複数回答あり）

学部	人数（n）	割合（n/93）
小学部・小学校	42 名	45.16%
中学部・中学校	30 名	32.26%
高等部	20 名	21.51%
幼稚部	1 名	1.08%
無回答	2 名	2.15%

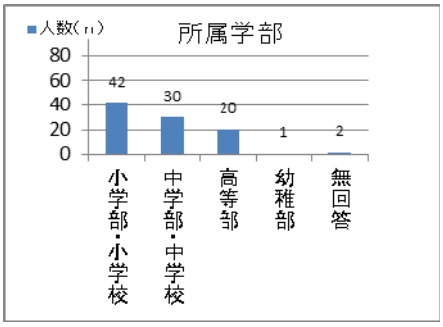


図 c：「所属学部」

d. 担当児童・生徒の障がい種　※複数回答あり

表 d：「担当児童・生徒の障がい種」（複数回答あり）

障がい種	人数（n）	割合（n/93）
知的	47 名	50.54%
肢体	17 名	18.28%
視覚	3 名	3.23%
聴覚	0 名	0.00%
情緒	7 名	7.53%
自閉	5 名	5.38%
教育相談	1 名	1.08%
無回答	22 名	23.66%

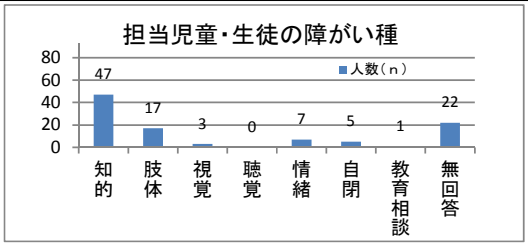


図 d：「担当児童・生徒の障がい種」

e. 教員経験年数

表 e：教員経験年数

年数	人数（n）	割合（n/93）
初任～4 年	36 名	38.71%
5 年～9 年	15 名	16.13%
10 年～14 年	6 名	6.45%
15 年～19 年	3 名	3.23%
20 年～24 年	8 名	8.60%
25 年～29 年	13 名	13.98%
30 年～	9 名	9.68%
無回答	3 名	3.23%
合計	93 名	100.00%

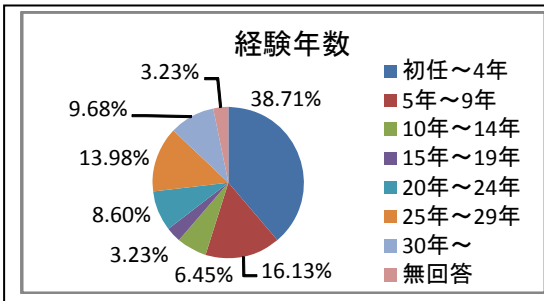


図 e：「教員経験年数」

f. 教員免許の種類　※複数回答あり

表 f：教員免許の種類（複数回答あり）

免許の種類	人数（n）	割合（n/93）
小学校	46 名	49.46%
中学校	68 名	73.12%
高等学校	40 名	43.01%
幼（幼保）	1 名	1.08%
特別支援	39 名	41.94%
音楽科免許所持	44 名	47.31%

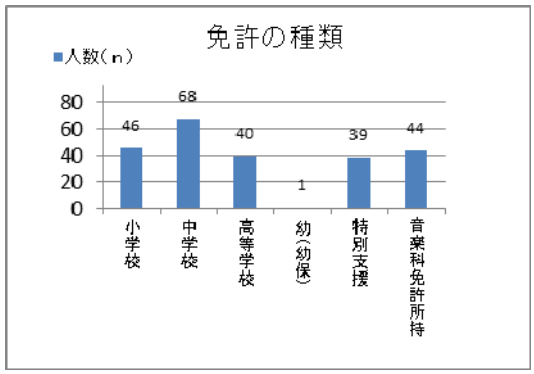


図 f：「教員免許の種類」

2）本年度の研修の日程やテーマについての評価（7 月／12 月 ; 12 ／26 質問紙回答）

本評価アンケートでは、研修の日程や流れ、講義と演習、協議のバランスについて、「長い⇔短い」、「大変満足⇔大変不満」等、3 段階もしくは 4 段階での評価をおこなった。また、研修への参加の是非については、「はい・いいえ」の二件法を用いた。

回答者は、前掲の表及び図のとおり、93 名（n＝93）であった。

g. 研修日程について（7 月：1 日＋半日）＋（12 月：半日）

表 g：「日程について」

評価	人数（n）	割合（n/93）
妥当	74 名	79.57%
長い	2 名	2.15%
短い	17 名	18.28%
その他	0 名	0.00%
無回答	0 名	0.00%
合計	93 名	100.00%

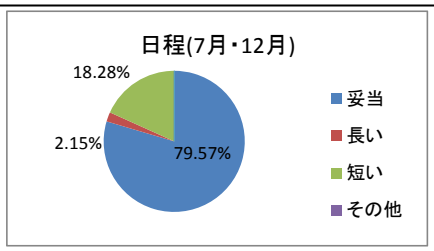


図 g：「研修の日程について」

h. 研修の流れについて

（7/27,28：講義+演習+グループ発表／7/29：講義+全体協議）→（学校での授業実践）→（12/26：グループ別協議+全体協議；活動発表）

表 h：「研修の流れについて」

評価	人数（n）	割合（n/93）
大変満足	7 名	7.53%
満足	80 名	86.02%
やや不満	6 名	6.45%
大変不満	0 名	0.00%
その他	0 名	0.00%
無回答	0 名	0.00%
合計	93 名	100.00%

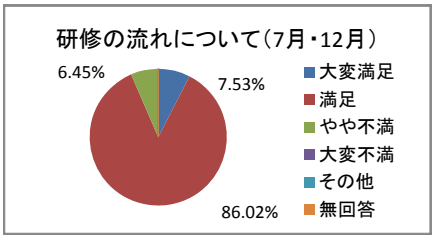


図 h：「研修流れについて」

i. 研修のテーマについて

「特別支援教育における音楽療法的視点を取り入れた授業づくり～楽器を使用した音楽活動～」

表 i：「研修のテーマついて」

評価	人数（n）	割合（n/93）
大変満足	7 名	7.53%
満足	80 名	86.02%
やや不満	6 名	6.45%
大変不満	0 名	0.00%
その他	0 名	0.00%
無回答	0 名	0.00%
合計	93 名	100.00%

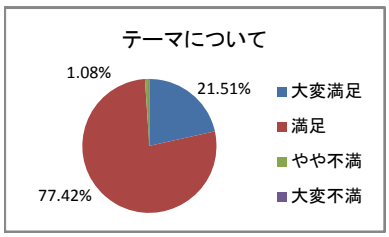


図 h：「研修流れについて」

j. 講義・演習・協議のバランスについて

表 j：「講義・演習・協議のバランス」

評価	人数（n）	割合（n/93）
大変満足	13 名	13.98%
満足	68 名	73.12%
やや不満	8 名	8.60%
大変不満	0 名	0.00%
その他	3 名	3.23%
無回答	1 名	1.08%
合計	93 名	100.00%

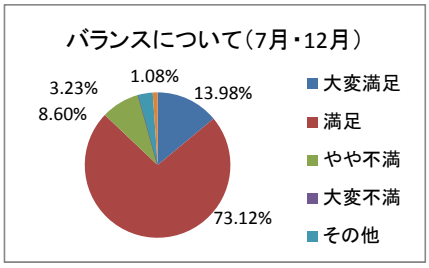


図 j：「講義・演習・協議のバランス」

k. 研修参加の是非①

問： あなたは、本研修に参加して良かったと思いますか？

表 k：「あなたはこの研修に参加して
よかったと思いますか？」

評価	人数（n）	割合（n/93）
はい	93 名	100.00%
いいえ	0 名	0.00%
合計	93 名	100.00%

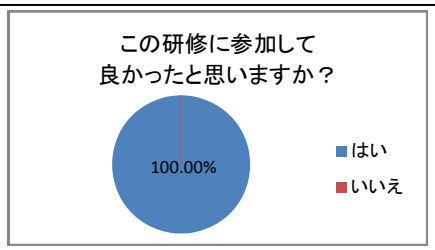


図 k：「あなたはこの研修に参加して
よかったと思いますか？」

l. 研修参加の是非②

問： 本研修は、今後の学校でのあなたの指導等に役立ちますか？

表 l：「本研修は、今後の学校でのあなたの
指導等に役立ちますか？」

評価	人数（n）	割合（n/93）
はい	93 名	100.00%
いいえ	0 名	0.00%
合計	93 名	100.00%

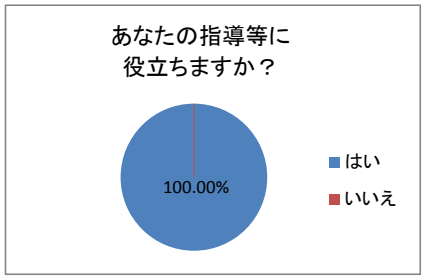


図 l：「本研修は、今後の学校でのあなた
の指導等に役立ちますか？」

m．各プログラム内容の評価

ここでは、7 月並びに 12 月に実施した、講義、演習、協議の各プログラム内容について、本研修カリキュラムにおいて実施したすべてのプログラムを選択肢として掲げ、その中から、良かった順に 5 つを挙げてもらった。評価の提示方法：1 番目：5 点、2 番目：4 点・・・5 番目：1 点と点数換算し、5 点×n（93 名）＝465 点満点として得点率を算出した。

表 m：「プログラム内容の評価」

プログラム内容	5×n(93) =465	得点率
講義：「子どもの発達と音楽」	129	27.74%
講義：「楽器を使用した音楽活動」	234	50.32%
演習：グループ別演習	302	64.95%
演習：まとめ（グループ発表）	104	22.37%
講義「学習指導案」	58	12.47%
講義：「楽器活動の指導案例～音楽療法の視点から～」	135	29.03%
協議：合同協議	37	7.96%
楽器の貸与	241	51.83%
協議：グループ別協議	116	24.95%
協議：全体協議（グループ発表）	82	17.63%

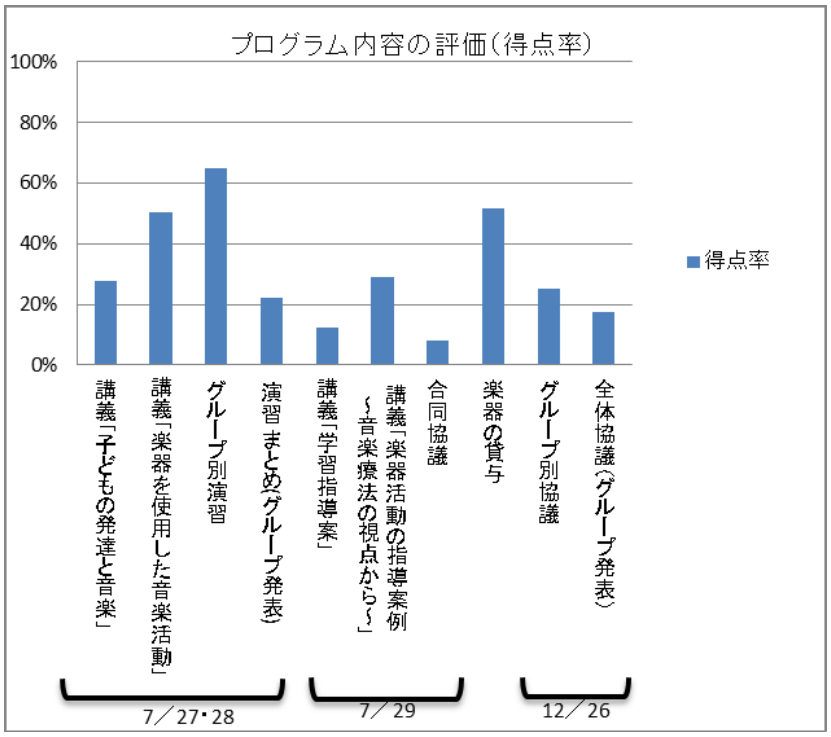


図 m：「プログラム内容の評価」

4. 成果（評価）のまとめ

平成 23 年度実施した本研修には、予想を超える受講希望が寄せられ、100 名という定員におさめるために人数調整がおこなわれた。ここからも、本研修がニーズの高い研修であったことがわかる。対象は、特別支援学校等の教員で音楽科を担当する教員とし、音楽の指導経験年数、音楽専科等によって、基礎と専門の 2 コースに分けて研修を実施する方法をとった。その結果、受講生の内訳は、経験年数が少ない教員が 4 割弱、経験年数が 20 年以上というベテランの教員が 3 割と、非常に幅広い経験年数の教員が集まり、基礎と専門に分けた意義が認められたと考える。上掲の有効回答数 93 名の評価アンケートの結果から、以下にまとめる。

・研修の日程について

8 割以上の回答者から「妥当」の長さであるとの回答を得、その他の 2 割弱はむしろ短かったという回答であった。この結果からも、受講生の本研修に対する意欲が読み取れ、あらためて今回のテーマに対するニーズの高さが認められる。

・テーマに関して

9 割を超える回答者が、「満足」と回答し、さらに今回の研修の参加の是非については、回答者の 100%が「参加して良かった」と回答している。本研修内容が、現場の教員のニーズに対応しているものと示唆される。

・今後の学校での指導等に役立つか

この問いに対しても、100%の回答者が「役に立つ」と回答している。このことからも、今回の研修が現場の教員のニーズに合致しており、研修後の授業実践に役に立ち、授業づくりの指導力向上に本研修が寄与できるものと考えられる。

以上のように、この度開発された本研修プログラムは、特別支援教育の現状に即した研修内容であったと見受けられる。これらの事柄から、今後の本研修カリキュラムの活用が大いに期待される。

Ⅲ　連携による研修についての考察

1. 連携状況及びプログラム実施状況

本研修は、本大学と神奈川県立総合教育センターとの連携のもと企画され実施した。連携状況とプログラム実施状況については、次頁の＜表 5＞にまとめて提示する。

2. 考察

＜表 5＞の連携状況を参考にして、連携先である神奈川県立総合教育センターが担った連携状況をもとに、以下 4 点から考察をする。

● 参加者の募集と人数の調整

特別支援学校を中心とした参加教員の募集は、総合教育センターが 4 月初旬から開始した。その結果、予想を超える参加希望が挙がり、センターが参加上限数の調整をおこなった。より多くの学校から参加者を受け入れるため、特別支援学校 1 校あたりの参加は 3 名程度とし、県立特別支援学校の約 9 割の学校から参加が見込まれ、混乱なく調整することができた。また、小学校と中学校の特別支援学級 1 校 1 名の受け入れとし、円滑な人数の調整がおこなわれた。

表 5 :「平成 23 年度　連携状況（昭和音楽大学 / 神奈川県立総合教育センター）及びプログラム実施状況」

日時	連絡協議会	研修、その他
4 月 12 日	第1回　連絡協議会 プログラムの実施計画の詳細について	
5 月 12 日		県立学校長会議（特別支援学校）にて連絡調整
5 月 17 日		各教育事務所、各県立特別支援学校への依頼文送
5 月 31 日	第 2 回　連絡協議会 プログラム実施計画：日程、広報他	
6 月 10 日		受講者名簿提出締切、人数調整
7 月 5 日	第 3 回　連絡協議会 プログラム実施計画 : 申し込み状況の確認、当日の資料と教材の確認他	
7 月 27 日　9:00～16:30		＜研修＞　基礎コース
7 月 28 日　9:00～16:30		＜研修＞　専門コース
7 月 29 日　9:00～12:00		＜研修＞　全体研修
9 月 20 日	第 4 回　連絡協議会 プログラム実施状況 : 実施報告とその評価、12 月の研修他	
10 月 28 日 11 月 8 日		＜指導主事訪問＞ 神奈川県立総合教育センター指導主事による研修参加学校への訪問
11 月 29 日	第 5 回　連絡協議会 プログラム実施状況：12 月の研修の確認と教材並びに DVD 製作の確認他	
12 月 19 日		＜指導主事訪問＞ 神奈川県立総合教育センター指導主事による研修参加学校への訪問
12 月 26 日 13:00～16:30		＜研修＞　全体研修
1 月 24 日	第 6 回　連絡協議会 プログラム実施状況:12 月の研修の報告	
3 月 23 日	第 7 回　連絡協議会 報告書作成、教材/DVD 製作の報告他	

● 基礎コースと専門コースの 2 コースに分かれて受講する研修形態

100 名にも及ぶ教員への研修の成果を上げる 1 つの提案として、音楽科の指導経験によるコース分けがセンターから提案され、本年度の研修は、参加教員の指導経験に合わせて、2 コースに分けて研修を実施することが検討された。音楽の教科は、指導教員の経験年数、また音楽技能により、その授業づくりの内容が大幅に変わる。それらを考慮し、音楽科の教員、並びに音楽の指導経験が豊富な教員を専門コースとし、それ以外の音楽の指導経験が比較的浅い教員を基礎コースとして研修を実施することとした。このコースの選択は、参加申し込み者の自主的な判断での選択としたが、コース分けの結果、特にグループ別演習において、教員のニーズに応じた課題設定とグループの構成メンバーに即したグループ学習が実施できたのではないかと考える。

● 担当している児童生徒の障がい種別によるグループ別演習／協議

グループ学習の効果をあげるためには、同一グループメンバーのニーズを可能な範囲で揃えることが検討された。そこで、申し込みの時点で参加教員の所属学校（学校種別、学級種別）を把握し、可能な限りグループ編成とメンバーの調整にいかすことが検討された。このグループ編成とメンバーの調整は、総合教育センターが担った。この結果、各グループのニーズに沿った演習課題に取り組むことができ、グループ別協議では協議がより深まったと考えられる。

● 授業実践している学校の訪問

7 月の研修後、受講した教員が授業実践をしている 9 月～12 月に、総合教育センターの指導主事が希望が挙がった特別支援学校へ訪問した。授業実践している授業を見学することで、研修成果を確認することができたとの報告があがっている。

以上のように、神奈川県立総合教育センターとの連携のもと開発され、実施した本研修プログラムは、最初に掲げた「研修の全体概要（図 1)」で示しているように、開発を担当した大学が担う役割と総合教育センターが担う役割を明確にし、密なる連携を取りながら研修を実施していった結果、本研修プログラムが受講生から非常に高い評価を得ることができた。

まとめ

最後に、平成23年度開発された本研修プログラムの実施結果を受け、まとめを報告する。

● 特別支援教育における音楽の研修に対するニーズの高さ

平成22年度の夏季に、神奈川県立総合教育センターで実施された選択研修の結果からもわかるように、特別支援教育に携わる教員の音楽の研修のニーズは高い。これは、冒頭でも述べられているように障がいの重度・重複化、多種多様化が進み、指導に携わる教員の指導力向上が求められており、特に専門的な知識・技能を要する音楽科教員の指導力向上への研修は、量的にもそして内容的にも不足しているのではないかと考える。

● 特別支援教育における音楽の教科以外の時間（行事等）の「音楽」の活用

特別支援学校に限らず、多くの学校において音楽活動は行事に取り入れられている。例えば、合唱祭や連合音楽会などが挙げられる。特に、特別支援教育の場においては、この機会がさらに多いものと推察される。

これらを踏まえると、特別支援教育に携わり音楽を担当している教員が、教科以外（行事や特別活動）における音楽指導の場面が増え、学校の中で担っていく役割が大きくなり、さらなる指導力向上が求められるのではないかと考える。

特別支援教育における音楽の研修は、音楽科を担当する教員のみならず、幅広く学校の行事等にかかわる教員をも対象に含め、音楽の指導力向上等に関する研修の実施が必要であろう。このような場合には、特に大きな集団に対応する指導力の向上をねらった研修や、児童生徒の実態に合わせた創造的音楽活動を含む内容の研修の実施が望まれる。

● 児童生徒の成長に寄り添える音楽

音楽は児童生徒の成長に寄り添える教科であると考える。小学校1年生の時にであい、そして高等部（高校）を卒業し、成人した際にも、余暇活動等の一環として音楽は存在し寄り添うことができる。それは、生活の中に音楽を生かすことへ繋がる。この生活の中に音楽を生かすことは、中学校の特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（文部科学省、平成21年）の中にも記載されていることであり、より良い音楽とのであいの音楽の授業づくりを目指すならば、今後も様々な視点から研修が企画され、実施されることが必要であろう。

● 音楽療法的視点を取り入れた授業づくり

音楽療法的視点を取り入れた授業づくりとは、音楽の持つ様々な機能を生かし、例えば児童生徒達にとって受け入れやすい教材や音・音楽から活動をスタートさせ、音楽の楽しさを教員と児童生徒が共有しながら、彼らの興味や意欲を引き出す、このような工夫が施

された授業づくりであると考える。また障がい種別や程度にかかわりなく、児童生徒の意思や意欲を尊重し、彼らの個性がどんな集団においても生かされる音楽活動の創造や工夫がなされる授業づくりも、音楽療法的視点を取り入れた授業づくりと考える。先にも述べたように、音楽はどの児童生徒にとっても、将来彼らの余暇活動の１つに成りうる可能性がある。その可能性の最初のスタートラインは、初等教育で既に始まっている。今後、音楽療法的視点を取り入れた授業づくりの研修が多くの場で実施され、研鑽が積まれることを期待する。

参考：文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部)』平成 21 年

Ⅳ　その他

●キーワード：特別支援教育　　音楽科　　音楽療法的視点　　授業づくり
楽器活動　　音楽活動実践報告集　　DVD　　演習　　協議

●人数規模：D　（51 名以上）
本研修は、定員 100 名で実施。　（延べ参加者数：296 名）
※ グループ別演習、並びにグループ別協議は、参加者全員が演習課題に取り組め、協議に参加できるグループ編成やメンバー調整を可能な範囲で実施するならば、学習効果はよりあがると考える。

●研修日数：　B　（2～3 日）
内訳：講義＋演習＋協議・・・・・・1 日半
授業実践後の協議・・・・・・半日

【問い合わせ先】
昭和音楽大学
学務部 次長　長谷部 信夫
〒215-8558　神奈川県川崎市麻生区上麻生 1-11-1　　℡　044(953)1121

神奈川県立総合教育センター
教育相談部 特別支援教育推進課 課長　井出 和夫
〒251-0813　神奈川県藤沢市亀井野 2547-4　　℡　0466(81)1582　（直）